『夜の寝覚』の始発と『源氏物語』

——太政大臣出自考——

赤迫照子

一

[1] そのもとの根ざしを尋ぬれば、そのころ太政大臣ときこゆるは、朱雀院の御はらからの源氏になりたまへりしになむありける。琴笛の道にも、文のかたにも、すぐれて、いとかしこくものしたまひけれど、女御腹にて、はかばかしき御後見もなかりければ、なかなかただ人にておほやけの御後見とおぼしおきてけるなるべし、その本意ありて、いとやむごとなきおぼえにものしたまふ。

（巻一・一五）[1]

物語冒頭、寝覚の女君の父太政大臣の出自が説明され、続いて妻二人の逝去と遺児四人の養育について語られる。

[2] 北の方、一所は按察使大納言の女、そこに男二人ものしたまふ。帥の宮の御女の腹には、女二人おはしけり。形見どもをうらやみなくとどめおきて、競ひかくれたまひにし後、世を憂きものに懲りはてて、いと広くおもしろき宮にひとり住みにて、男女君たちをも、みな一つに迎へ寄せて、世のつねにおぼしうつろふ御心も絶えて、一人の御羽の下に四所を育みたてまつりたまひつつ、男君には笛を習はし、文を教へ、姫君のいとすぐれて生ひたちたまふには、姉君には琵琶、中の君には箏の琴を教へたてまつりたまふに、おのおのさとうかしこく弾きすぐれたまふ。

（同一五～六）

この『寝覚』の冒頭は、永井和子氏が「設定そのものは橋姫冒頭の要約ごとき観を呈する」と述べられたように、[2]『源氏物語』橋姫巻によく似ており、太政大臣は宇治の八宮を思わせる。以下、永井氏の論等の先行論に拠って、[3]具体的に該当箇所を確認しておく。

[3] ①母方なども、やむごとなくものしたまひて、筋異なるべきおぼえなどおはしけるを、…

（橋姫・六・二五五）[4]

②さすがに広くおもしろき宮の、池山などのけしきばかり昔に変らで、いといたう荒れまさるを、…

（同二五八）

③故君の亡せたまひにしこなたは、例の人のさまなる心ばへなど、たはぶれにてもおぼし出でたまはざりけり。

（同二五九）

④姫君に琵琶、若君に箏の御琴、まだ幼けれど、常に合はせつつ習ひたまへば、聞きにくくもあらで、いとをかしく聞こゆ。

（同二六一～二）

⑤父帝にも女御にも、疾く後れきこえたまひて、はかばかしき御後見の、取り立てたるおはせざりければ、才など深くもえ習

ひたまはず、まいて世の中に住みつく御心おきては、いかでかは知りたまはむ。　（同二六二）

⑥つれづれなるままに、雅楽寮の物の師どもなどやうの、すぐれたるを召し寄せつつ、はかなき遊びに心を入れて生ひ出でたまへれば、そのかたは、いとをかしうすぐれたまへり。　（同二六二）

太政大臣が遺児を育む様子を比喩的に表現したFも、『寝覚物語全釈』が指摘するように、[5]父宮への感謝を詠んだ宇治の中の君の歌「泣く泣くも羽うち着する君なくはわれぞ巣守になりは果てまし」（二六一）の趣を踏まえたと考えられる。

このように、『寝覚』の太政大臣と宇治の八宮は極めて近似しているけれども、両者は全く重なる訳ではない。何といっても、太政大臣は宇治の八宮と違って「いとやむごとなきおぼえ」を得、政治の中枢にいる人物なのである。源氏に降りながらも世間の信望を集め、太政大臣にまで昇りつめる――このありかたは光源氏に似ている。やはり先行研究に従って、[6][1]の太政大臣と桐壺巻の光源氏との重なりについても確認しておく。

[4]①わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことことしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。　（桐壺・一・三一）

②無品の親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、わが御世もいと定めなきを、ただ人にて朝廷の御後見をするなむ、行く先も頼もしげなることとおぼし定めて、…　（同三二）

「はかばかしき御後見」がいない我が皇子の将来を思い、臣籍降下させた父帝は桐壺帝をイメージさせるし、[1]波線部「朱雀院の御はらからの源氏」という言い方も、なにやら光源氏を思わせよう。

太政大臣は宇治の八宮的な要素によって、愛妻家で、子どもを可愛がる父性愛に溢れた人物として造型された。一方、光源氏的な要素は宇治の八宮に纏わる落魄のイメージを払拭し、代わりに、父帝に愛され惜しまれつつも臣籍降下した後、才高く栄華を極めた者としてのイメージを太政大臣に付与する。このような宇治の八宮と光源氏の抱き合わせは、類い希な美貌と楽の才能をもつ主人公寝覚の女君を良家のお嬢様として設定するために要請されたのであろう。太政大臣が光源氏のように更衣腹ではなく、宇治の八宮と同じ女御腹なのも、女君の家柄の高さを保証するためと考えれば納得がいく。

このように、太政大臣の出自は、物語世界の構築の都合によって、宇治の八宮的要素と光源氏的要素とを混合させたものとみられる。が、その混合のさじ加減によって、『寝覚』は女御腹で源氏に下るという、史実ではあり得ない状況を生み出してしまった。史実上、一世源氏で女御の母を持ち、太政大臣になった者はいない。『寝覚』は冒頭から史実とのずれを抱えているのである。

二

例えば、『狭衣物語』、狭衣大将の父堀川大臣の出自も『寝覚』の

太政大臣と同様に、史実からかけ離れたものといえる。

[5]この頃、堀川の大臣と聞こえさせて関白したまふは、一条院、

当帝などの一つ后腹の五の皇子ぞかし。母后もうち続き、帝の御筋にて、いづ方につけても、おしなべての大臣と聞こえさするもかたじけなけれど、何の罪にか、ただ人になりたまひにければ、故院の御遺言のままに、帝、ただこの御心に世を任せきこえさせたまひて、公私の御ありさまめでたし。（巻一・二一）[7]

父は帝、母は后でありながら、堀川大臣は源氏に降ったという。堀川大臣に近い例といえば、為平親王の例がある。為平親王の父は村上天皇、母は中宮安子。同腹の兄（冷泉天皇）・弟（円融天皇）と違い、為平親王は即位できなかった。しかし為平親王は堀川大臣と異なり、源氏にも関白にもなっていない。史実上、「当帝などの一つ后腹」で源氏になった例など存しないのである。現実世界には前例のない堀川大臣の臣籍降下の事情について、『狭衣』は「何の罪にか」と口ごもるばかりで、それ以上何も説明してくれない。

この堀川大臣の特異な出自は、そのまま狭衣大将の血筋の高さを保証し、狭衣大将即位という物語の結末を必然とする。そもそも堀川大臣は皇位につくはずの人であったという前提によって、狭衣大将即位の論理は構築されるのである。『狭衣』の世界は史実とのずれに立脚して形成されているのであった。逆にいえば、史実とは次元を異にしなければ、『狭衣』の世界は構築不可能だったのである。深沢徹氏は、堀川大臣の設定は「物語自らが、現実の単なる反映たることを激しく拒絶して、現実とのまったき訣別を、自らに宣したもの」と述べられた。[8]『狭衣』はその始発において、明らかに現実世界から脱する態度をとっているのである。

とはいえ、『狭衣』は史実とのずれに全く無頓着だった訳ではない。「いづ方につけても、おしなべての大臣と聞こえさするもかたじけなけれど」とか、「何の罪にか」と一言付け加えられ、堀川大臣の例外性について一応気は配られているのではあった。[9]

三

話を『寝覚』に戻したい。『狭衣』に比べて、『寝覚』では太政大臣の例外性について何の釈明もされていない。史実から乖離した女御腹の一世源氏を物語世界に取り込んでいるというのに、『寝覚』はそれに構わず、続けて一気に数十年の出来事を語り終えてしまう。

もっとも、太政大臣の出自が史実上になかったとしても、物語の展開に何ら支障はないし、前掲の深沢氏が述べられたように、[10]物語というものは現実世界の引き写しではないのだから、それで構わないのであろう。先にも述べたように、太政大臣の出自の高さはヒロインの家柄の高さそのもので、女君の高貴な血統の証明は[1]のような説明で十分なのである。女御腹の一世源氏、しかも太政大臣の地位まで昇るという設定が史実上に例がないからといって、それが『寝覚』の傷だとは思わない。それよりも私が注目したいのは、史実とのずれに無頓着な（もしくは無意識・無自覚な）『寝覚』の姿勢

と、『寝覚』の『源氏』への依存や読者への信頼とが表裏一体を成している点なのである。

『寝覚』は太政大臣の出自の説明はおざなりに、女君の物語――女君が天人の夢を見、男君に出逢い、悩み苦しんでいく展開を早く進めようと急ぐ。[3][4]で具体的に確認したように、『寝覚』は宇治の八宮・光源氏の要素が継ぎ接ぎされた太政大臣の出自を設定することで、女君の生い立ちに纏わる説明を手短に済ませ、素早く女君の物語にとりかかっていくのである。すなわち、『寝覚』は『源氏』に頼り、かつ、読者も宇治の八宮・光源氏を思い出してくれるはずという見通しの下で、太政大臣の出自の説明を端的に済ませ、それで安心しきっているのであった。『源氏』引用によって太政大臣の出自や数十年の出来事をなんとなく読者にイメージさせて物語以前を補完し、そして物語を紡ぎ始めていくのである。

稲賀敬二氏が指摘されたように、男君の設定に天喜四年（一〇五六）あたりの源師実が下敷きになっていたり、[1] 散逸した物語末尾において女君が「広沢の准后」となるのは、長和五年（一〇一六）の道長室倫子や永承六年（一〇五一）の後冷泉女御歓子の准后宣下の例が援用されていたりと、[2] 所々で準拠といえそうな箇所は物語中、確かにある。ただ、『寝覚』の始発を支えているのは現実の世界ではなく、『源氏』の世界であった。

[注]

(1)『夜の寝覚』本文の引用は小学館「新編日本古典文学全集」（鈴木一雄校注・訳）による。末尾の（　）内に巻・頁数を付記し、注記・符号・傍線等を私に付した。

(2)永井和子氏「寝覚物語の老人」（『国語国文論集』第15号　学習院女子短期大学　昭61・3、後、『続寝覚物語の研究』笠間書院　平2に所収）。

(3)前掲（2）永井氏論文や同氏「宇治十帖と寝覚物語―作者と読者の問題―」（『武蔵野文学』第16号　武蔵野書院　昭43・12、後、『続寝覚物語の研究』に所収）他、「新編日本古典文学全集」、『寝覚物語全釈』（関根慶子・小松登美氏校注・訳　学燈社　昭35　増訂版　昭47）、石川徹氏「『夜半の寝覚』出典考」（『帝京大学文学部紀要』第17号　昭60・10）等を参考にさせていただいた。

(4)『源氏物語』本文の引用は「新潮日本古典集成」（石田穣二　清水好子校注）による。末尾の（　）内に巻・頁数を付記し、注記・符合・傍線等を私に付した。

(5)『寝覚物語全釈』では宇治の八宮・宇治の姉妹が水鳥を題材に歌を詠じた場面あたりに「影響されたのであろう」とある。

(6)前掲（3）に同じ。

(7)『狭衣物語』本文の引用は「新編日本古典文学全集」（小町谷照彦・後藤祥子校注・訳）による。末尾の（　）内に巻・頁数を

付記し、傍線を私に付した。

(8)「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造（上）—陰画としての『無名草子』論—」（『文芸と批評』5巻3号　昭54・12、後、『研究講座　狭衣物語の視界』王朝物語研究会　新典社　平6に所収）。

(9)『狭衣』は現実世界の常識ではありえない狭衣大将の即位という展開に関しても、とりあえず配慮をしている。天照大神の御神託や夢想によって、狭衣大将の即位を必然的にしたとしても、『狭衣』成立当時の常識からいえば、皇孫で源氏の狭衣大将が即位するというのはあまりに現実離れの感が拭えない。『狭衣』もそれは心得ていたのであろう、「近き世に、かかる例も殊になきことなりと、おほやけを誇りたてまつるべきやうもなければ、なほ、いかなる事にかあらんと、言ひ悩む人多かるに」（巻四・三四四）「かねてより、世に珍しかるべきことに、天の下言ひ古しつれど」（同三五〇）と、人々は狭衣大将即位の唐突さについて噂したという記述がある。狭衣大将即位に対する人々の評価・感想が記されるというのも、『狭衣』が史実とのずれに対して配慮した痕跡なのではないか。特に「近き世に、かかる例も殊になきことなり」というのは、「「近き世」ではない頃、遠い昔には一度源氏に降ったのに親王に戻り、即位した先例——宇多天皇の例はあったけれども…」ということを暗に含んでいよう。『狭衣』は遠回しながら史実上の例を持ち出し、狭衣大将即位について読者が納得するように、幾らか気を遣ってはいるのである。ちなみに「新編日本古典文学全集」は「いったん臣籍に下った者が帝位に即くようなことは、最近なかったことである。宇多帝の例は九世紀末。」と注する（巻四・三四四）。宇多天皇は元慶八年（八八四）、源氏に臣籍降下。仁和三年（八八七）に親王宣下、同年即位。

(10)前掲（8）論文。

(11)「康平三年『寝覚』成立・仮説」（『源氏物語の研究—物語流通機構論』　笠間書院　平5）。

(12)「後期物語は『源氏物語』の亜流か—「寝覚の広沢の准后」と「源氏の准太上天皇」」（『国文学　解釈と教材の研究』42巻2号　平9・2）。

——あかさこ・しょうこ、広島文教女子大学非常勤講師——